

神田 浩史 特定非営利活動法人 泉京・垂井 副代表理事

地域の活性化や、循環型社会の実現に向けて、フェアトレードが活用されている。岐阜県の垂井町では、フェアトレードに地産地消を組み合わせ、地域の人びとが穏やかに豊かに暮らせる『穩豊社会』を目指す。

「今日から垂井町もフェアトレードタウンを目指します！」。今年三月に熊本市で開かれた第八回フェアトレードタウン国際会議のなかの分科会「日本におけるフェアトレードタウン運動」のなかで、わたしはキッパリと宣言した。四年前から始めた、フェアトレードデイ垂井の関係者のあいだでは議論の端にのぼっていたフェアトレードタウン構想。垂井町内での調整を始める前に、対外的に宣言することで、小さな町の大きな挑戦は始まった。

揖斐川中流域の交通の要衝・垂井町

岐阜県不破郡垂井町は濃尾平野の北西端に位置し、町のまんなかを揖斐川支流・相川が貫く扇状地にある。古に美濃の国府や一宮が置かれ、江戸時代には中山道と美濃路の分岐点の追分宿として多くの人馬が往来した。今日も東海道本線・新幹線、名神高速道路などが通る交通の利便性の高さから、多くの工場が立地している人口約二万八〇〇〇人の小さな町である。

垂井町は、工場立地や交通の利便性の高さゆえ

境内で。かつては一二月の報恩講で見世物や露店が立つて賑わったというお寺に、約二五店の出店と天候にも恵まれ、三〇〇〇人も人出でこった返した。三年目からはさらに大きな会場である垂井町立朝倉運動公園で開催するようになり、約六〇店の出店に来場者は四〇〇〇人にまで膨らんできた。一方で、やみくもに規模拡大することへの疑問の声も出始めたので、フェアトレードや地産地消を扱う基準を厳しくして、四年目となる今年は出店者こそ約五〇店と絞り込んだが、来場者は五〇〇〇人ほどまでになった。

循環型社会を目指して

フェアトレードはおもに途上国の収奪的な生産構造を改めることを目標にしているが、このような問題意識はわたしたちの身近でも大切である。古来、揖斐川流域では、流域内の物資循環、人の往来、それらに伴う資金循環を基本に地域社会が成り立っていた。上流域の木々は薪炭や用材として中下流で活用され、中流域から下流域にかけては肥沃で水利に優れた田畑に恵まれ、河口部の伊勢湾の漁業は流域の恵みを活かして盛んであった。こういった流域単位の循環型社会は、一〇〇年ほど前に舟運から陸運へと輸送手段が切り替わり始めたころから変容し、上流域のダム建設、エネルギー革命などさまざまな要因が加わり、衰退の一途をたどってきた。

経済のグローバル化の進展により、収奪的な構造のもとで生産された低価格の農林水産品が大量に輸入されてきた。そのため、日本各地で農林漁業は衰亡の途をたどっており、それは揖斐川流域において

に急激な人口減は免れているものの、一見豊かな緑に見える町内の山林には荒廃林が目立ち、田畑の維持も困難で、農林業を巡る状況は全国各地の

農山村と変わらない。おまけに近隣山村からの薬草や薪炭を商うことで賑わっていた中山道垂井宿は、今や往時の面影はなく、商店街として活況を呈したという半世紀前の姿も消え失せて久しい。

このような町で四年前に、フェアトレードデイ垂井を始めた。垂井町内でフェアトレード商品を扱うカフェと、わたしも所属しているまちづくりNPO法人泉京・垂井が、おもに岐阜県内でフェアトレード商品を扱っているお店に声掛けして、フェアトレードや世界の南北格差についての理解を少しずつでも高めていこうと考えた。一年目は町内の地区集会所を借りて一〇店舗ほどの出店から始まった。フェアトレード月間の五月とは思えない土砂降りの天候にもかかわらず、予想外の大勢の来場者があり、建物に入れない人も出るほどの盛況ぶりだった。

二年目は町内で最大のお寺・平尾御坊願證寺の

も例外ではない。しかしながら、近年、そういった流れに抗うような試みが流域各所に見受けられるようになつてきた。上流域では、豊かな水資源や林産物を再生可能エネルギーとして活用する試みが、中流域では、多くの直売所の現出による農産物の地産地消の促進が。そして下流域では、元々盛んだった蛤や蜆の復興による漁業再生が。

現在は点在しているこういった試みが、もう一歩も二歩も流域住民に知られるようになり、自覚的に流域住民に活用されるようになれば、揖斐川流域の循環型社会の再興の可能性も絵空事ではなくなる。わたし自身、不正ともいえる収奪構造に依拠した生産・消費構造から脱却し、環境適合型の生産・消費活動を支える社会のことを『穩豊社会』と名付けている。穩豊とは、内面的にも対外的にも穏やかであることが豊かであるという意味である。揖斐川流域での循環型社会の再興は、まさにこの『穩豊社会』の実現に向けての歩みであると位置づけている。

一里塚としてのフェアトレードタウン

垂井町には、国の史跡に指定された中山道のふたつの一里塚のうちのひとつが存在する。小さな町がフェアトレードタウンを目指すことは、それ自体非常に大きな挑戦である。しかしながら、フェアトレードや地産地消をまちづくりの根幹に置くことを宣言するフェアトレードタウン宣言は、『穩豊社会』の実現に向けては一里塚に過ぎない。この宣言が、垂井町の一里塚のように地域の人たちに愛され、後世まで語り継がれるよう、フェアトレードタウンを目指す小さな町の大きな挑戦を見守って欲しい。



揖斐川源流域坂内の小水力発電

揖斐川河口付近・正面は長良川河口堰



第8回フェアトレードタウン国際会議で発言する筆者

第4回フェアトレードデイ垂井会場のようす

